

令和7年度 自己点検・評価書

令和8年7月

佐賀大学

肥前セラミック研究センター

I 現況及び特徴

佐賀大学はCOC（Center of Community）として地域貢献を推進する大学を目指し、次の100年を担う窯業人材育成のため、平成25年に佐賀県と協力協定を結んだ。その後、平成28年4月に芸術地域デザイン学部を設置し、佐賀県立有田窯業大学校を統合し、佐賀大学有田キャンパスを発足すると同時に、肥前窯業圏の研究を中心とした地域貢献を目的とした肥前セラミック研究センターを設置した。

このような背景と現在の地域状況を考慮し、佐賀大学の基本的な役割は、肥前窯業の持続性を支える研究と教育であるということを再認識し、本学で平成28年12月に策定された中期計画カルテとアクションプランに基づき、肥前セラミック研究センターの設置に伴う機能強化経費等プロジェクト実行経費事業「やきものイノベーションによる地域共創プロジェクト」の推進強化を行った。

令和5年、第4期に入り各部門が目標に向け動き出したが、各部門の活動計画に加え、3部門が協働して取り組む体制とそれによる目標を示していないという反省から、第4期1年を過ぎていたが、令和6年度より、センター長をプロダクト・アート研究部門から選出し、「次世代に向けた有田焼の商品開発」の具体的な活動を進めることで、3部門全体での目標とし事業推進を図っている。

令和7年度「次世代に向けた有田焼の商品開発」は有田焼新作品評会に発表するとともに、大学生協にて販売、ロクロ技術者養成プログラムを開始した。また、セラミックサイエンス研究部門は「古陶磁の考古学をサイエンスで分析」、マネジメント研究部門は「肥前窯業圏産業再生モデルの構築」を発表し、それぞれ肥前陶磁器産業とその地域に貢献した。

肥前セラミック研究センターは、プロダクトデザイン・アート研究部門、セラミックサイエンス研究部門、マネジメント研究部門の3つの研究部門から構成され、平成5年度には、それぞれ、4名、9名、4名うち、2名（非常勤の特任教授、准教授）が専任教員、専任の非常勤研究員1名、14名が併任教員という構成。令和7年からの体制は、4名、8名、3名の15名うち、1名（非常勤の特任教授）が専任教員、14名が併任教員、5名の客員研究員、加えて2名の外国人客員研究員で構成。

【根拠資料1】 肥前セラミック研究センター活動報告書 令和7年度版（9月発行予定）

II 目的

肥前セラミック研究センターは、有田焼、伊万里焼、唐津焼、波佐見焼などの肥前陶磁の伝統的技術・工芸の継承と、ファインセラミックスの先進技術、市場調査や伝統産業地域の歴史と現状等の課題分析を組み合わせ、表現活動、プロダクトデザイン研究開発、素材開発、原料や制作技術の応用、産業分析と課題調査を行い、人材育成及び、地域と地域産業の活性化に貢献することを目的とする。また、学内外における異分野教員が横断的に協力し、佐賀県窯業技術センター、佐賀県立九州陶磁文化館、地元陶磁器関連企業、海外の陶磁器関連大学等との連携により「やきものイノベーション」の創出を図り、地域社会の持続的発展に資することを目的とする。

【根拠資料 1】 肥前セラミック研究センター 活動報告書 令和 7 年度版 （9 月発行予定）

【根拠資料 2】 佐賀大学肥前セラミック研究センター規則

Ⅲ 教育の水準の分析（教育活動及び教育成果の状況）

分析項目Ⅰ 教育活動の状況

（1）「肥前セラミック学」開講

令和 4 年度から、本学学部生を対象とした全学教育機構の全学教育科目（基本教養科目（自然科学と技術の分野））「肥前セラミック学」を開講している。本庄キャンパスでの陶磁器に関する講義やセラミックスに関する化学実験とともに、有田キャンパスでの陶磁器の制作体験や、有田町のフィールドワークも含んだものとなっており、3 研究部門の特徴を統合したセンターならではの講義となっている。

（2）未来を拓く材料の科学Ⅱ（佐賀大学令和 7 年度 後学期 教養教育科目）

身近な無機材料や陶磁器の開発の歴史とその機構ならびに利用を、板書や配布資料や PowerPoint ファイルを用いて講義し、新しい無機材料が新たに生み出す世界を考察することができる人材の育成を目標とする。

（3）佐賀県立有田工業高校キャリア教育支援 講義「ファインセラミックスについて」

（4）有田町（秋の陶器市時の有田市街地）見学への引率/窯元調査。

（5）外国人研究員 2 名の研究発表。

（6）「佐賀大学の有田焼」有田新作品評会発表及び、販売。

（7）ロクロ技術者養成プログラムを開始。

（8）「武雄市を中心とする古陶磁片及び、原料の科学的分析と考古学的分析」を実施。

（9）「肥前陶磁器業の近現代経営史 ―伝統産業地域の歴史と現状及び、仮題」についての調査研究、報告実施。

（10）「2026 国際陶磁交流学術大会韓国・韓国」の開催に向け、中国、台湾、韓国、日本による国際陶磁交流学術大会の開催準備交流を行う。

（11）「有田陶芸協会＋佐賀大学合同展」主催：佐賀玉屋、2026.2.18～2.23、場 所：佐賀玉屋、学生 12 名と有田陶芸協会の合同展

○優れた点・特色ある点

- ・3部門がそれぞれの方向から強みを生かし、肥前陶磁器産業に対し過去、現在、未来をフィールドに「佐賀大学の有田焼」の有田新作品評会発表及び、販売開始、「ロクロ技術者養成プログラム」の開始、「武雄市を中心とする古陶磁片及び、原料の科学的分析と考古学的分析」の実施、「肥前陶磁器業の近現代経営史 ―伝統産業地域の歴史と現状及び、課題」の調査研究、発表提言を行い、関わる学生は大きな学びと研究の課題を得た。
- ・地域、高校生、本学学生に対する、異分野融合型のセンターの特徴を生かした授業提供や教育支援を継続して行っておりキャリア教育の実践となっている。
- ・外国人研究員2名を受け入れ、多様な海外の陶磁器に関する研究のアプローチと共同研究の成果発表を学生や地域に紹介することができた。
- ・「'26 国際陶磁交流学術大会韓国・韓国」の準備交流を行い、国際的教育環境の整備を行っている。

○改善すべき点

改善を要する事項	改善計画・改善状況	進捗状況
・「肥前セラミック学」の異分野のオムニバス授業の一貫性	異分野融合型のセンターの特徴を生かした大学教育への貢献が必要とされていたが、焼き物を通した異分野融合型の研究成果の講義への反映、新科目の開設など、改善できた。	☐ 検討中 ☐ 対応中 ☒ 対応済 ☐ その他 ()

分析項目Ⅱ 教育成果の状況

(1) 研究成果の教育への反映

本センターの研究に関連して教育を行い研究テーマとして捉えた学生は、合計32名いた。

(2) アリタ・マシュマロ・クリスマス2025

アリタセラクリスマスイベント実行委員会の要請で学生によるイベント用オリジナルマグカップのデザイン作成を行い、学生の地域活動参加と制作スキルの向上につながった。

(3) 「陶交会×佐賀大学展」窯元との交流展開催により、産地の技術習得、人材養成に繋がる。

(4) 「次世代に向けた有田焼の商品開発」について「佐賀大学の有田焼」のタイトルで有田新作品評会発表、大学生協にて販売開始。同時にロクロ技術者の人材養成プログラム開始。

(5) 「有田陶芸協会+佐賀大学合同展」主催：佐賀玉屋、2026.2.18～2.23、場所：佐賀玉屋、学生12名と有田陶芸協会の合同展

○優れた点・特色ある点

・「次世代に向けた有田焼の商品開発」は、「佐賀大学の有田焼」として販売環境を整備し、ロクロ技術習得の教育プログラムとして運用している。技術習得のプログラムで発生する成果物を有田新作品評会に発表し、大学生協等で販売することで、技術習得の意欲向上と練習コストの軽減が図れる仕組みが構築できた。 ・「有田陶芸協会＋佐賀大学合同展」「アリタ・マシュマロ・クリスマス 2025」「陶交会×佐賀大学 PROJECT」など、様々に有田陶磁器産業界にかかわり大きな刺激を受け研究ができています。 ・サイエンス、マネジメント、アート・デザインの各部門で、多くの学生が本センターの課題を研究テーマとして取り扱っている。
--

○改善すべき点

改善を要する事項	改善計画・改善状況	進捗状況
これまでそれぞれの部門がそれぞれの分野で、或いは協働し陶磁器の文化的側面を講演会や成果報告会で学生の教育に反映してきたが、3部門が協働した成果を教育への還元までつなげるべきである。	令和7年度3部門がそれぞれの方向から強みを生かし、肥前陶磁器産業に対し過去、現在、未来をフィールドに「佐賀大学の有田焼」の有田新作品評会発表及び、販売開始、「ロクロ技術者養成プログラム」の開始、「武雄市を中心とする古陶磁片及び、原料の科学的分析と考古学的分析」の実施、「肥前陶磁器業の近現代経営史ー伝統産業地域の歴史と現状及び、課題」について、調査研究、発表提言を行うことができた。	☐ 検討中 ☐ 対応中 ☒ 対応済 ☐ その他 ()

IV 研究に関する状況と自己評価

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

肥前陶磁器業の近現代経営史—伝統産業地域の歴史と現状及び課題についての調査研究と報告

- (1) 森永太一郎等の磁器販売に着目した肥前窯業圏及び他産地との人的ネットワークの構築にかかわる調査研究と報告
- (2) 「次世代に向けた有田焼の商品開発」は「佐賀大学の有田焼」のタイトルでの有田新作品評会発表及び、販売開始。「ロクロ技術者養成プログラム」を開始した。
- (3) 完全無収縮自硬性陶磁器原料の開発と応用
- (4) ムライトファイバーを含む新しい陶磁器原料を製造（成形体の乾燥と焼成）時の収縮率世界最小の約 0.4%、応用を探る。ペルオキソ金属錯体及び、それを前駆体としたセラミックスの合成と応用研究を企業 2 社と進めている。
- (5) 産業廃棄物の陶磁器・セラミック材料への利用研究を企業 1 社・佐賀県窯業技術センター（共同研究）、企業 2 社（秘密保持契約）
- (6) 武雄市の受託研究「武雄市を中心とする古陶磁陶片及び原料の科学的分析と考古学的考察」を、考古学者と共同で実施。追加研究。今年度有田町の古陶磁片を分析。論文にまとめる。
- (7) アスベストへの色素吸着機構の解明により、廃棄物中のアスベストの検知に関する研究を行っている。
- (8) 近赤外ラマン散乱及び、ルミネッセンスを用いた古陶磁の研究、非破壊分析に関する研究を学外の研究機関と行った。
- (9) 陶磁器廃材・廃素焼き片・廃石膏型の有効利用に関する研究を企業と連携し行った。また、それら廃材を使った藻礁による藻場の再生の研究を佐賀県や企業と行った。

・各教員の研究課題及び共同研究相手

次ページに、研究課題等の一覧表を示す。

プロダクトデザイン・アート研究部門で 4 テーマ、セラミックサイエンス研究部門で 13 テーマ、マネジメント研究部門で 3 テーマの研究が実施された。

佐賀県窯業技術センター、有田町歴史民俗資料館、泉山磁石場組合、地元企業等の肥前地区の窯業関連機関とともに、(独)環境再生保全機構、瀬戸市文化振興財団埋蔵文化センター、国立研究開発法人日本原子力研究開発機構、景德鎮陶磁大学、民間企業等との協働での研究活動を行った。

研究テーマの多くは肥前地区の窯業関係機関とともに行われており、地域に密着した研究が実施されていることがわかる。

研究課題と連携相手

部門	教 員	研究課題	連携相手
PA	田中	焼成時無収縮磁器土による成形法開発と造形表現への応用	佐賀県窯業技術センター
PA	三木	3D デジタルデザインツールを用いた陶磁器製品開発	佐賀県、有田町、佐賀県陶磁器工業協同組合、企業 3 社
PA	湯之原	異素材を利用した陶磁器表現の研究	佐賀県窯業技術センター
PA	田中・湯之原・甲斐・三木	次世代に向けた有田焼の商品開発	佐賀県窯業技術センター
部門	教 員	研究課題	連携相手
CS	一ノ瀬・矢田・蒲地	完全無収縮陶磁器の開発と応用	佐賀県窯業技術センター
CS	一ノ瀬・矢田	ペルオキソ金属錯体及びそれを前駆体としたセラミックスの合成と応用研究	企業 2 社
CS	一ノ瀬・矢田・川喜田・蒲地	産業廃棄物の陶磁器・セラミックス材料への利用研究	企業 1 社・佐賀県窯業技術センター（共同研究）、企業 2 社・秘密保持契約
CS	海野・一ノ瀬	有田町を中心とする古陶磁陶片及び原料の理化学的分析と人文科学的考察	有田町歴史民俗資料館（共同研究） 佐賀県窯業技術センター
CS	矢田・田端	廃棄建材中のアスベストの検知に関する研究	企業 1 社
CS	近藤	泉山粘土と天草粘土の物理・化学性および可塑性の比較検討	
CS	海野	近赤外ラマン散乱およびルミネッセンスを用いた古陶磁器の産地同定法に関する研究	佐賀県窯業技術センター 有田町歴史民俗資料館
CS	海野	近赤外ラマン散乱およびルミネッセンスを用いた非破壊分析に関する研究	瀬戸市文化振興財団 埋蔵文化財センター
CS	川喜田	セラミックス層導入円管チューブによる生体分子・粒子の分離	
CS	川喜田	泉山陶石の有効利用に関する研究	佐賀県窯業技術センター、 泉山磁石場組合、企業 1 社
CS	根上	陶磁器廃材・廃素焼き片・廃石膏型枠の有効利用に関する研究	企業 1 社
CS	根上	リサイクルマテリアルを用いた藻礁による藻場の再生	佐賀県、企業 1 社（共同研究契約）
CS	磯野	リチウムイオン電池用正極材料の開発	
部門	教 員	研究課題	連携相手
MGT	有馬	有田町への外国人訪問者に関する研究	有田商工会議所
MGT	山本	肥前窯業に関する企業者史研究	山田雄久（近畿大学）

MGT	洪	ヤキモノに対する消費者の購買意識に関する調査研究	
部門	教 員	研究課題	連携相手
客員研究員	蒲地	強化磁器、高精度磁器等の新規機能性陶磁器の開発	
	浜野	肥前窯業圏における事業化デザインに関する研究	
	田端	シンクロトロン光を用いる陶磁器の化学組成と産地確定法の研究 建材の表面染色による石綿の迅速識別法の研究	
	山田	肥前陶磁器業の経営発展と企業者活動に関する歴史研究	
	前田	肥前陶磁器の創造的な人材育成	
	HAO	シンクロトロンを用いた古陶磁の特性評価	田端正明 理工学部産学官連携研究員、 呉軍明 景德鎮陶磁大学教授（共同研究）
	Brian	新しい伝統鑄込み：代替型を利用したセラミック製造への新しいアプローチ	

【根拠資料】 肥前セラミック研究センター 活動報告書 令和7年度版（9月発行予定）

○優れた点・特色ある点

・3分野からそれぞれ地域と産業に対して、調査、研究、成果の提供が行われている。 ・ラマン分光法によるセラミックスの分析技術開発と古陶磁の分析への応用、シンクロトロン光を用いた産地推定法の研究などが、陶磁器の歴史的研究に大きな進展をもたらし研究機関より高い注目を頂いており、「有田町を中心とする古陶磁陶片及び原料の理化学的分析と人文科学的考察」に発展し継続して研究を進めている。 ・「佐賀大学の有田焼」のプログラムが始動した。
--

○改善すべき点

改善を要する事項	改善計画・改善状況	進捗状況
・学会会議、シンポジウム等による、研究の成果周知と発信をさらに積極的に行う。	・令和8・9年度、研究成果の集約と発表、研究紀要編集に力を入れる。	☐ 検討中 ☒ 対応中 ☐ 対応済 ☐ その他 ()

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

- ・学術発表 19 件（学会発表や学術講演等）
- ・学術論文等掲載 16 件（著書、論文、解説等、内コンクール入賞等の作品発表を査読付き学術論文相当とする 8 件）

- ・作品発表・展示会数 181 件
- ・共同研究・受託研究・秘密保持契約等 3 件
- ・地域連携協定 1 件（H29～九州陶磁文化館、佐賀県窯業技術センター、芸術地域デザイン学部）
- ・国際研究交流協定 1 件（H30～韓国窯業技術院 Icheon 分院）

主な研究成果

- (1) 「次世代に向けた有田焼の商品開発」についてプロトタイプの制作を学生と共に進め。
- (2) 「エントランスギャラリーでのプロトタイプ等展示発表」では有田キャンパスエントランスギャラリーで、授業での成果や研究成果展、卒業制作展等を開催。
- (3) 「有田キャンパスストリートギャラリー運営」では有田キャンパス前のガラスケースに学生・教員の作品入れ替えを行い、有田町の景観演出に寄与。
- (4) 「陶交会×佐大 PROJECT」は有田陶交会と佐賀大学学生が協働し、制作プロセスの情報交換を行い、研究制作を行う。陶交会と共に 3 月に佐賀県立九州陶磁文化館で研究制作成果を展示発表した。
- (5) 「有田陶芸協会＋佐賀大学合同展」主催：佐賀玉屋、2026.2.18～2.23、場所：佐賀玉屋、学生 12 名と教員、有田陶芸協会の合同展を開催した。
- (6) 「江戸時代の経営」についての講演会と「有田観光の現況と有田焼業界の最新動向」についての研究会を佐賀大学 4 号館にて開催した。参加人数約 90 名。
- (7) 「有田焼にかかわる経営とまちづくり」「肥前窯業史における創造的企業家活動と今日における創造的工芸家の育成の可能性」と題したマネジメント研究部門研究会を行った。
- (8) (公社)日本セラミック協会主催の第 38 回秋季シンポジウム研究発表において、“色素染色による廃棄建材中のアモサイトの検知”“陶土とセルベンが陶磁器製造時の収縮率に及ぼす影響”と題した発表を群馬大学で行った。
- (9) (公財)農業農村工学会主催の令和 7 年度農業農村工学会大会講演にて「フライアッシュ・ジオポリマーによる底泥の地盤改良効果と配合方法について」を発表している。
- (10) 第 62 回化学関連支部合同九州大会にて「廃棄建材表面の石綿の色素染色による誤検知の要因」「アンモニウムイオン濃度がペルオキシチタン酸粒子の生成に及ぼす影響」を発表。
- (11) 令和 7 年度土木学会西部支部研究発表会にて「特殊土や米ぬかとリサイクル材を有効活用した低環境負荷型藻場基盤材の開発」第 60 回地盤工学研究発表会にて「リサイクル材を主材とする低環境負荷藻礁の作製・設置とモニタリング」を発表。
- (12) 化学工学会第 56 回秋季大会にて「管状吸着剤による拡散性と強制対流性を利用した粒子分離方法の開発」を発表
- (13) 九重分子科学セミナーにて「近赤外ラマン・発光分光法による古陶磁片の非破壊分析」を発表。

- (14) 第 64 回セラミックス基礎科学討論会にて「ペルオキシモリブデン錯体の合成と光酸化能の評価」「廃棄建材表面の石綿の色素染色による検知」を発表。
- (15) (公社) 日本セラミックス協会 2026 年度年会にて「ムライトファイバーの添加方法が超低収縮陶磁器の製造と性質に及ぼす影響」を発表。
- (16) The12th SagaUniversity-DaeguUniversity International Joint Symposiumにて「Analysis of Ancient Ceramics Sharfs using Near-Infrared Raman/Luminescence Spectroscopy」「Dynamic Adsorption Behavior of Negative Charge Molecules by Polymar Adsorption Layer on the Inner Surface of Polyimide Tubes」「Effect of Ammonium Ion Concentration on the Formation of Peroxotitanic Acid Particles」「Synthesis and Characterization of Peroxovanadium Complexes」を発表。

○優れた点・特色ある点

- ・陶磁器生産地域における地域の諸問題に対するアプローチをマネジメントの領域から行って地域の活性に繋げている。
- ・地域に対し陶磁器制作の研究発表を継続的に行っている。
- ・サイエンスのそれぞれの専門領域の研究を進め、地域の抱える諸問題に対応した研究発表となっている。

○改善すべき点

改善を要する事項	改善計画・改善状況	進捗状況
研究成果の検証と記録を、学術論文や学会発表等で発表していく。	成果物の発表等を積極的に打ち出していくと共に、論文等にまとめる。また、シンポジウムや研究発表会により成果を公表していく。令和7年度は、4期の成果を具体的に示すよう計画している。	☐ 検討中 ☒ 対応中 ☐ 対応済 ☐ その他 ()

V 国際交流及び社会連携・貢献に関する状況と自己評価

国際交流

- (1) 外国人研究員2名の受け入れ ・ブライアン・アンダーソン氏、2024. 9. 1～2025. 6. 1 フルブライト奨学金受給、アメリカ・イリノイ大学シカゴ校工業デザイン学部准教授 ・ヨハンナ・ラウラ・コニック氏、2024. 10. 1～2025. 8. 31、JSPS 日本学術振興会奨学金受給、イギリス・ウェストミンスター大学メディアアート教育研究センター博士研究員、特にブライアン氏の研究は、サステイナブルな有田焼の生産に寄与するもので今後センターの外部研究員として研究を続ける。
- (2) 「'26 国際陶磁交流学術大会韓国」視察・交流会、韓国伝統文化大学 伝統美術工芸学科 陶磁専攻 教授 崔成在(Choi Sungjae)、2025. 2. 23
- (3) 「第 14 回在来知歴史学国際シンポジウム (ISHIK2025)」論文発表および研究報告

テーマ：森永太一郎のアジア観、2025. 11. 1-2、
電気通信大学

地域貢献

- (1) 有田キャンパス ストリートギャラリー作品展示入替
2026. 2. 24～ 、場所：有田キャンパス前県道沿い ストリートギャラリー
- (2) 有田ニューセラミック研究会
主催：有田ニューセラミックス研究会、2025. 4. 22、5. 1、5. 28
- (3) 第 20 回有田ウィンドウディスプレイ甲子園
主催：一般社団法人 有田観光協会、2025. 8. 5～8. 27（展示期間）、
展示場所：西松浦郡有田町内山地区、福岡県・佐賀県・長崎県の 5 校、16 チーム（50 名）の高校生が参加
- (4) 第 21 回有田秋の陶磁器まつり（ありたぱれっと参加）
主催：一般社団法人有田観光協会、2025. 11. 20～11. 24、
場所：有田町内山地区（泉山～中の原）
- (5) 「有田陶芸協会＋佐賀大学合同展」 主催：佐賀玉屋 、2026. 2. 18～2. 23 、場 所：佐賀玉屋、学生 12 名と有田陶芸協会の合同展
- (6) アリタ・マシュマロ・クリスマス 2025
主催：アリタセラクリスマスイベント実行委員会（佐賀県、有田町、有田焼卸団地協同組合）、2025. 12. 13～14, 12. 20～21、場所：アリタセラ
- (7) 委託研究報告書発行「武雄市内遺跡再整理事業報告書」
タイトル：” 武雄のやきもの”、委託相手：武雄市、発行：2025. 7 月
- (8) 陶交会×佐賀大学 PROJECT、タイトル：color、2026. 3, 3～8、九州陶磁文化館

○優れた点・特色ある点

・アメリカ、イギリスから奨学金受給研究員を 2 名受け入れ研究交流を行ったことは、センターにも地域に対しても大きな成果を提供できた。その内、一人の研究者は本センターの海外客員研究員として継続研究する。
・地域貢献において、九州陶磁文化館、窯業技術センターとの協力関係や、窯業関係組合との催しの開催など地域焼き物産業との連携はうまく機能している。窯業関係機関、窯元等への就職も安定して供給できている。
・陶磁器産業の担い手不足に対し、人材養成プログラムを構築し地域の課題に対応した。

○改善すべき点

改善を要する事項	改善計画・改善状況	進捗状況
中断したイスラエルのベベツァルエル美術デザインアカデミーとの交流	これまで交流を積み上げてきた、ドイツ・ブルグギビヒェンシュタ	☐ 検討中 ☐ 対応中 ☒ 対応済 ☐ その他

の新たな道筋を作る。	イン芸術デザイン大学、オランダ・アイントホーヘンデザインアカデミーとの学生交流に加え、教員間での交流も行っている。韓国窯業技術院利川分院 (KICET)、韓国・国民大学校、中国・景德鎮陶磁大学との交流も再開している。さらに、アメリカ・イリノイ大学、イギリス・ウィンストミンスター大学の教員・博士研究員との研究交流を始めた。 「' 26 国際陶磁交流学術大会・韓国」に参加し、韓国、台湾、中国の陶芸大学と学術交流を行う計画を整えた。さらに国際化を推進する。	()
-------------------	---	------------

[参考 1 : 自己点検評価の観点 (機関別選択評価項目 B 及び C より抜粋)]

B 地域貢献活動の状況

大学の目的に照らして、地域貢献活動が適切に行われ、成果を上げていること。

- ・大学の地域貢献活動の目的に照らして、目的を達成するためにふさわしい計画や具体的方針が定められているか。また、これらの目的と計画が適切に公表・周知されているか。
- ・計画に基づいた活動が適切に実施されているか。
- ・活動の実績及び活動への参加者等の満足度等から判断して、活動の成果が上がっているか。
- ・改善のための取組が行われているか。

C 教育の国際化の状況

大学の目的に照らして、教育の国際化に向けた活動が適切に行われ、成果を上げていること。

- ・大学の教育の国際化の目的に照らして、目的を達成するためにふさわしい計画や具体的方針が定められているか。また、これらの目的と計画が広く公表されているか。
- ・計画に基づいた活動が適切に実施されているか。
- ・活動の実績及び学生の満足度等から判断して、活動の成果が上がっているか。
- ・改善のための取組が行われているか。

VI-I 組織運営・施設・その他部局の重要な取組に関する状況と自己評価

(1) 令和6年度活動報告書発行 (2025.12)

(2) ホームページ更新 <http://www.hizen-cera.crc.saga-u.ac.jp/>

(3) 肥前セラミック研究センター運営委員会

出席者：肥前セラミック研究センター運営委員会委員

列席者：研究協力課係長、事務補佐員

開催日：第1回 2025.8.6 オンライン会議

第2回 2026.1.30 メール会議

内 容：各種審議、報告等

(4) 四者会議

出席団体：佐賀県立九州陶磁文化館、佐賀県窯業技術センター、芸術地域デザイン学部、肥前セラミック研究センター

開催日：2026.3.27

場 所：有田キャンパス

内 容：センター現況報告、意見交換

(5) 有田キャンパス地域連絡会

出席者：関係自治体、学識経験者、窯業関係団体代表、芸術地域デザイン学部長、肥前セラミック研究センター長、芸術地域デザイン学部、肥前セラミック研究センター

開催日：2026.3.27

場 所：有田キャンパス

内 容：センター現況報告、意見交換

○優れた点・特色ある点

・四者会議（佐賀県立九州陶磁文化館、佐賀県窯業技術センター、芸術地域デザイン学部、肥前セラミック研究センター）、有田キャンパス地域連絡会（関係自治体、学識経験者、窯業関係団体代表、芸術地域デザイン学部長、肥前セラミック研究センター長、芸術地域デザイン学部、肥前セラミック研究センター）の開催により、毎年の本センターの活動について、評価や提案を集め、活動の検証につなげている

・3部門それぞれ、陶片の科学的分析による考古学的考察や、陶磁器産業の課題についての調査など、有効な研究結果が見られたと共に、昨年度までの懸案であった3部門間の連携強化について、「次世代に向けた有田焼の商品開発」に対し、マネジメント部門、サイエンス部門の成果を活用し、「佐賀大学の有田焼」の発表をみ、連携が機能した。

○改善すべき点

改善を要する事項	改善計画・改善状況	進捗状況
令和５年度までで専任教員３名の内２名（上席研究員・准教授）が退職し、令和６年度からの専任教員は非常勤の特任教授１人となる。専任教員の増員が望まれる。	第４期の活動計画に対して効果のある地域や産業に対しての企画や運営の出来る専任教員を希望していたが、適当な人材が見込めず確保できていない。令和８年度より非常勤の特任教授は、特別研究員となり外国人特別研究員を１人招聘。専任教員はいない。	☒ 検討中 ☐ 対応中 ☐ 対応済 ☐ その他 （

ⅥーⅡ 明らかになった課題等（本学職員以外の者による意見を含む）に対する改善の状況又は改善のための方策

（※必須記述です。構成設定は部局の判断とします。）

なお、別紙様式【「令和５年度部局の自己点検・評価書」に基づく改善すべき点とその改善状況及び「令和６年度部局の自己点検・評価書」に基づく新たな改善すべき点一覧】は、令和７年９月の質保証統括本部会議等において、協議・検証するため、別途提出を要する。

○改善すべき点

改善を要する事項	改善計画・改善状況	進捗状況
四者会議（佐賀県立九州陶磁文化館、佐賀県窯業技術センター、芸術地域デザイン学部、肥前セラミック研究センター）において、四者の協働について、進んでいないという意見が出た。	「陶片の科学的分析による考古学的考察」の研究を進めることにより、４者のそれぞれの課題解決になるとして、九州陶磁文化館の資料についての分析を更に進める。	☐ 検討中 ☒ 対応中 ☐ 対応済 ☐ その他 （